水平的統合の概念を中心に

佐　藤　一　夫
（秋田県生涯教育センター）

1．はじめに

我が国で生涯教育が提唱されて十数年になり，生涯教育という言葉は定着したようにみえる。しかし，理念，理論，実践の関係をみると，必ずしもしっくりといっているとはいえないような気もする。

生涯教育論に今，何が問われているかと質問をうけても，考えあぐねてしまうだけである。それは，生涯教育をみる角度があまりにも多いからである。

「生涯教育対策実践シリーズ第１巻」（ぎょうせい発行）の「理論化への努力」の中で伊藤俊夫氏は「‥‥は，生涯教育構想の根幹をなす＝integrated＝の概念を取り入れていることである。統合の概念は，人々の生涯にわたる学習を保障することを前提に教育が行われる場や機会・内容を相互に，かつ時系列的なラセン形に統合し，その実をあげようとする教育機能の総合的構築論である。しかし，ここでは，便宜上，統合の概念を４類型に分けてみる」と述べ，その４類型として「水平的統合の概念，垂直的統合の概念，内容的統合の概念，手段的統合の概念」をあげている。

そこで，主として水平的統合（教育が行われる場，即ち学校，家庭，社会の統合）の概念にスポットをあて，現状を踏まえ，その課題を探究してみようと考えたのである。

2．生涯教育の観点にたった社会教育

生涯教育は，学校教育，家庭教育，社会教育を包括する概念で，この三教育領域の統合と拡散にあるといわれてきた。しかし，生涯教育推進の状況をみると，ほとんど社会教育に重点を置いたものといえる。だから，生涯教育といっても中味は社会教育ではないか，生涯教育と社会教育とは実際にどこが違うのか，などの声も聞えるのは当然である。

生涯教育を推進するには，まず社会教育の充実，発展を図る必要があるとの認識が強く働いたからで，これも止むを得ない事実である。その理由として，第一に家庭教育は生まれてから20歳位までの教育であり，学校教育は幼稚園入園に始まり大学卒業で終る25歳位までの教育である。そのあとの人生約50年位は社会教育の範疇（在学青少年に対する社会教育もあるが）になっているからである。第二に我が国の社会教育は学校教育に比べ総じて遅れていたので，生涯教育の提唱を機会にしてその遅れを取り戻そうという気運が醸成され，次第に脚光を浴びてきたのである。第三に一般行政でも社会教育的な施策が増加してきたため，教育行政における社会教育の見直しが求められるとともに，一般行政との調整を図る必要が生じたからである。第四に家庭の教育力が低下し，児童・生徒をめぐるいろいろな問題がおきてきた。その対応として親の教育が促され，その教育の場である社会教育が重視されたからである。第五に学校教育には問題があるにしても，制度的に確立している今日，その形や内容を急速に変えることは困難である。あまり枠にはめられていない社会教育にまず力を注いだほうがやりやすいという考え方がでてきたからである。などがあげられる。

従って，生涯教育の中でも社会教育は大きなウエートを占め，学習者が

次第に増加するとともに，集団・集合学習の内容・方法も改善され，個人学習の援助にも目を向けるなど量・質とも大きく変容してきた。このことは生涯教育の観点にたって社会教育を進めた結果の表われであり，生涯教育の理念が社会教育を通してある程度浸透した証左であるともいえる。

3．生涯教育をめざす学校教育

生涯教育の観点に基づいた学校教育のあり方についても強調しているものの，何をどのようにやればよいのか，生涯教育体系の中での学校教育の役割は何なのか，など不明瞭な点が多く，一部で試行錯誤を繰り返している段階であると思う。それは社会教育と異なり対象者が固定し，公的，法的な枠の中で対応しなければならない要素が多いからである。例えば，生涯教育などと仰仰しく取り上げなくても教育課程にそって，あるいは学習指導要領に従って教育していることが生涯教育ではないかなどの意見もある。

もちろんそれにも一理はあるが，学習指導でも，生徒指導でも，進路指導でも，微視的に学校教育サイドだけより見たり，考えたりする場合と，生涯教育の観点や体系に合わせて見たり，考えたりする場合では，大きな違いがでてくるのは当然である。だから，学校教育も生涯教育に焦点をあてて見直すことが求められてきているのである。

生涯教育をめざす学校教育のあり方を考える場合取り敢えず，次の２点を大事にする必要があると思われる。

第一は生涯にわたって学習を続けることのできる児童・生徒のために，学校教育の中で身につけなければならない基礎・基本とは何かを明らかにし，それに必要とする要素を知識・技能・態度などにわけて整理することである。第二は児童・生徒が生涯生きがいある人生を送るために「将来を考える力」を育て，正しい職業観，勤労観，人生観をもつことができる方策を考えることである。これらを学校経営や日々の教育営為の中で生かし

ていくことが当面の課題であると思う。

なお，学校教育に携わる教師は学校教育領域の研究だけでなく，生涯教育全般についての研究も深めることが今日的課題として考えてもよいのではなかろうか。

4．生涯教育のスタートは家庭教育

生まれて初めに出合う教育は家庭教育である。家庭教育は子どもの成長に，あるいはその人の生涯にわたる生き方に大きな影響を与えるといわれている。

家庭教育は親またはこれに準ずるものが子どもに対して行う教育であるから，建前としては親の考え方でできるものである。しかし，子どもの教育をめぐる問題が多様化している今日，簡単には家庭教育ができなくなりつつあるので，家庭教育についての親の学習の必要性が高まってきている。その親の学習を援助するのは主として社会教育であるから，家庭教育と社会教育とは密接な関係にあり，その面からの社会教育の充実が望まれている。

家庭教育のために，社会教育の充実を図るには，子どもの成長課程や発達課題，更に現実の問題に即した，段階的で，キメのこまかい学習内容を親のために用意することと，親の個人学習援助の方策を拡大することが，これからの課題であるように思われる。

5．学校教育と社会教育，家庭教育の連携

学校教育，家庭教育を充実し，また社会教育の変容を図るには生涯教育の理念を生かして進めることは極めて大事である。この考えは各方面に広がりをみせ，その成果も次第に認められてきた。

しかしながら，生涯教育の水平的統合という考え方からすると，これで

よいというわけにはいかない。

水平的統合に近づく一歩とみられるのが，学校教育と社会教育（家庭教育も包含して）の連携である。

これについては各地でいろいろな試みが行われている。小・中学校段階では，公民館などの社会教育機関が，学校教育に働きかけ学校外の教育活動をすすめたり，PTA の活動を核にして連携のあり方を模索しているのが多いようである。高等学校段階では，学校開放の形態が多く，学校の施設・機能を一般住民に提供することによる連携である。大学では，社会人のために専門講座を開いたり，社会教育機関に専門の講師を派遣するなどの連携の姿がみられる。

学校教育と社会教育の連携はそれぞれが協力と援助，あるいは影響し合うことによって一つの教育領域のもつ不完全性を補っていくものである。そういう意味で考えると，学校教育と社会教育の相互乗り入れは，水平的統合の一段階として評価されるべきものだろうが，本質に迫るための研究はこれからの課題である。連携の相互影響性の確認とその限界，各々の役割分担の明確化，連携による効果の測定などが今後の研究課題と考えられる。

なお，これから重視しなければならないのは，家庭教育と学校教育との直接的な連携である。その推進を図るため，第一に児童・生徒の発達課題，生活課題に対応した家庭教育，学校教育の役割を明確にする。第二にこの個々の課題解決のための両教育領域の関係と影響性を確認する。第三はその上にたって家庭教育と学校教育が相互連携を深めながら指導していく。などが必要である。

社会教育を通しての家庭教育と学校教育との連携は，もちろんそれなりに大事であるが，家庭教育と学校教育との直接的な連携の方途を考えることも今日的課題であると思われる。

6．総合教育計画の策定

学校教育，家庭教育，社会教育の統合は，生涯教育の理念として，また理想論としては誰もが肯定するところであるが，制度，構造，形態などに相違あるものを統合しようとするものであるから簡単にできるものではない。完全な統合の実現は各方面からの研究と，かなりの時間を要するものと思われる。

ただそれに近づくと思われる一つの傾向として，市町村に総合教育計画を策定しようとする動きがでてきていることである。

今までの教育計画は一般的にみて学校教育計画と社会教育計画は別々に，あるいはばらばらに策定され，その連関性はあまり考えられなかった。また，中・長期教育計画の策定といえばほとんど社会教育の分野だけであったように思われる。(学校の統廃合や学校建築などは別にして)それが，最近では生涯教育の理念やそれに基づいた目標を掲げ，学校教育と社会教育の重点とその実施計画，生涯教育の推進体制など，一貫性のある総合教育計画が策定されつつある。もちろんその形は市町村によって異っているが，新たな発展の方向として注目したい。

この総合教育計画を，どのような形で，どのような内容で，どのようにして策定するかなどの研究と実践はこれからの大きな課題といえるだろう。

この総合教育計画がどの程度整備されるかが水平的統合の評価のめやすになり，更には生涯教育の行方を占う鍵をにぎっているように思われる。

7．他の統合概念に対する課題

これまで主として水平的統合の概念に対する課題を述べてきたが，これ以外の概念についても多種多様な課題を抱え込んでいる。その課題の内容についてはスペースの関係で述べることはできないが，主な項目だけ次に

あげてみたい。

(1)　垂直的統合の概念からみて

○ハビガーストの発達課題と今日的課題

○学習体系プログラム

○発達課題と世代間交流

○リカレント教育

(2)　内容的統合の概念からみて

○企業における職能教育と全人格的教育

○一般教養学習とスポーツ，趣味学習

○個人の生きがいと地域づくり

(3)　方法的統合の概念からみて

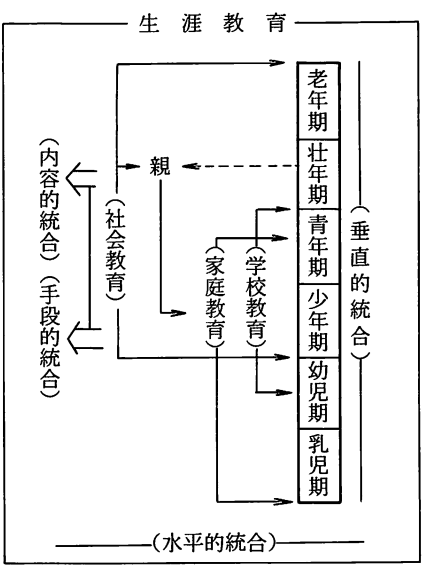
○個人学習と集団・集合学習

○学習者と指導者・助言者

○一般行政における教育的事業

○施設間のネットワーク

○推進体制の整備



これらは一つの概念だけの課題ではなく，複雑多岐にからみあっている。

8．むすび

統合の概念は，それぞれ独立して存在するものではない。伊藤俊夫氏も「生涯教育は教育機能の総合的構築論である」と述べているように，互いに関連し合っているのは当然で

ある。それを図に示すと次のようになると思われる。

この統合の概念を全体的にとらえ構造化することができれば生涯教育論がもっと明確になるだろう。従って，その全体的な統合の構造化を図ることが生涯教育論に問われる最大の課題と考えている。

そう考えると，どうしても生涯教育論を構成している，それぞれの統合の概念の課題を究明することが先決のように思われ，まず水平的統合の概念からアプローチした積りである。果たして生涯教育論に問われるものの一端を明かにすることができただろうか。各位からのご批判をいただければ幸いである。